

プレドラグ・マトヴェイエーヴィチの《書簡集》について

阿部 賢一

0 「亡命」のコノテーションの変容

EU 拡大により域内における「境界」の意義が曖昧になりつつある今日、全体主義体制下とは異なる文脈において、二〇世紀の「亡命作家」の問題が語られ始めている。アメリカの研究者カレン・カプランが、「欧米のミドルクラスの故国脱出者たちは、亡命者の属性を、芸術産出のイデオロギーとして採択した」¹として、従来の「欧米モダニズム」が「亡命」を特権化していると批判を行っているが、このようなカプランの見解は、「公式文学」と「亡命文学」を差異化する傾向のある全体主義の文学批評に援用することができよう。また、EU 拡大という文脈においては、実際問題として、亡命、なかでも、EU 域外からの移民および難民の問題が、政治的なレベルのみならず、大きな問題となっている。EU 各国はまだ難民に対する共通認識を設定できない状況にあるが、これは、EU が自己規定、とりわけ「ヨーロッパ人」の積極的な規定ができないことと密接な関係にあると思われる。

このような背景のなかで、「稀有なヨーロッパ市民」²と称されるプレドラグ・マトヴェイエーヴィチの著作を考察することは、多くの示唆を与えてくれるように思われる。というのも、ヘルツェゴヴィナ出身のマトヴェイエーヴィチは「ノマド」という表現に特徴付けられ、彼自身、著作の中でも論じているように、「亡命 (exil)」と「アジール (asile)」の中間状態を積極的に捉え、特定の言語文化の言説に拘束されない知識人の在り方を提示しているからである。様々な文化事象を縦断的に論じる比較文学者マトヴェイエーヴィチの博識は、邦訳『地中海——ある海の詩的考察』³および『旧東欧世界——祖国を失った市民の告白』⁴でも十分に発揮され、卓越したエッセイストとしての側面はこれらの著作を通じて周知の所である。だがマトヴェイエーヴィチには、見逃すことのできない側面がある。無数の「公開書簡」の作家としての顔である。しかしながら、マトヴェイエーヴィチの一連

1 カレン・カプラン『移動の時代——旅からディアスポラへ』村山淳彦訳、未来社、2004年、65頁。

2 ロベール・プレション「稀有のヨーロッパ市民」、プレドラグ・マトヴェイエーヴィチ『旧東欧世界——祖国を失った市民の告白』土屋良二訳、未来社、2000年、237-253頁。

3 プレドラグ・マトヴェイエーヴィチ『地中海——ある海の詩的考察』沓掛良彦・土屋良二訳、平凡社、1997年；Predrag Matvejevič, *Breviary méditerranéen* (Paris: Fayard, 1992).

4 プレドラグ・マトヴェイエーヴィチ『旧東欧世界——祖国を失った市民の告白』土屋良二訳、未来社、2000年；Predrag Matvejevič, *Le monde «ex»—confessions* (Paris: Fayard, 1996).

の書簡集からなる「書簡文学」とも言うべき書簡集の全体像はまだ十分に論じられていない。そのため、本稿では、マトヴェイェーヴィチの書簡集⁵を繙きながら、マトヴェイェーヴィチの「亡命」観、「東方」への眼差し、「書簡体」に対する考えについて考察を進めることにする。

1. 『《アジール》と《亡命》の狭間で』

書簡集を繙くまえに、まず、マトヴェイェーヴィチ自身の出自について簡単に触れておくべきであろう。なぜなら、1932年、ヘルツェゴヴィナのモスタールで、ロシア人の父とクロアチア人の母のあいだに生まれたプレドラグ・マトヴェイェーヴィチの出自そのものが、宿命的に「亡命」と結びついているからである。

私は子供の頃から「アイデンティティの問題」に直面していた。そういう呼び方があることは私自身も周囲の親族も知らなかった。私は、自分が誰なのか、誰に属しているのか、どんなところがほかの人と違っているのか、ただそれだけを考えていた。おそらく、それは私の受けついで遺産の一部だった。父はウクライナ出身だったが、ウクライナの言葉を習ったことはなかった。帝政ロシアの学校はすべてロシア人の学校であり、教育全体がロシア化されていた。父が生まれた、黒海に面した町オデッサには、ウクライナ人よりもロシア人のほうが多く、ほかにも、ユダヤ人、ポーランド人、ギリシア人、アルメニア人が暮らしていた。出身と違う言葉のずれ——自分が属する民族としてのウクライナと自分を育てたロシア文化とのあいだの溝——がロシア革命以上に父を移住へと駆りたてた。父をのぞいて親戚はみな、オデッサに残り、そのうちの何人かは収容所で死んだ。

父は二十歳のときにクリミアで、ヴランゲリ將軍の白軍とともにイスタンブールに向かう船に乗ってユーゴスラヴィアに着き、そこで非常に新ユーゴスラヴィア的なクロアチア人一家の女性と結婚した。母も出身がはっきりしていなかった。私のアイデンティティは父より母に近かった。私はクロアチアの民族主義者とは無縁のクロアチア人、「統一ユーゴスラヴィア主義」をもたないユーゴスラヴィア人になった。父はま

⁵ 「書簡集」に関連する4冊の著作の関係を時系列に沿って整理しておく。第一に発表されたのが、クロアチア語で執筆され、1985年にベオグラードで自費出版された『公開書簡』Predrag Matvejević, *Otvorena pisma* (Zagreb, 1985) である。著者によると、75通の書簡が収録されているとされている。続いて、新たに書き加えられた文章を大幅に追加して、フランス語の文章も加えて発表したのが『もうひとつのヨーロッパからの書簡』Predrag Matjevitch, *Épistolaire de l'Autre Europe* (Paris: Fayard, 1993) である。収録された書簡は最も多く121通ある。翌1994年には、ザグレブで『東方書簡』Predrag Matvejević, *Istočni epistolari* (Zagreb: Ceres, 1994) が出版されているが、この著作の大半はフランス語に翻訳され『アジールと亡命のあいだ——ロシア書簡』Predrag Matjevitch, *Entre asile et exil. Épistolaire russe* (Paris: Stock, 1995) として1995年にパリで発表されている。基本的には、クロアチア語版の『東方書簡』の翻訳であるが、収録数（前者は57通、後者は69通）、掲載順序、文章の改行位置などの点で異なっている。筆者は『公開書簡』を未見のため、4作品を同列で比すことはできないが、『東方書簡』と『ロシア書簡』に収録されている書簡はほぼ同一であるが、これに対して、『もうひとつのヨーロッパからの書簡』は、『東方書簡』と『ロシア書簡』に付随する多数の書簡が追加されている。本稿では、フランス語で執筆されたテキストを同レベルで検討することができることから、『もうひとつのヨーロッパからの書簡』と『ロシア書簡』との対比に重点を置き、検討を行うことにする。

ず、ロシア語とロシア語のなかにある主体性を、それから、父が子供の頃にロシアで習ったフランス語を私に伝えた。私は明らかに国際主義者になる運命にあった。私の原罪——コスモポリタニズム——は民族主義者にも共産主義者にも好かれるものではなかったにちがいない。私はごく早い時期から罪の意識を感じはじめ、その後もその意識は大きくなるばかりであった。この意識が私の子供時代を辛いものにした。時が経つとこの状態にも慣れてきたが、すっかり忘れてしまうようなことは一度もなかった。そして、今度は私自身が、かつての父のように移住することになった。

おそらく、そうした状況から逃げ出したのだ。⁶

「アイデンティティ」の問題につねに直面していたマトヴェイエーヴィチは、いわゆる「亡命二世」であり、「エスニシティ」・「言語」の複数性により、特定の、固定化した意識を有することができずにいたことがわかる。「国際主義者」というレトリックはみずからの出自の不確定さを隠す装置であり、それは著書が当初から近年にいたるまで「統一ユーゴスラヴィア主義」の支持者であったこととも関係している。「ロシア」と「クロアチア」という自身の出自の複数性は、ユーゴスラヴィアを構成していた「民族」・「エスニシティ」の複数性のなかでは、ある程度の適応は見いだすことができたのかもしれないが、「統合」あるいは「同化」というプロセスは、マトヴェイエーヴィチにとって非常に克服しがたいものであった。同化の対象であったのはエスニシティのレベルではなく、共産党体制という政治的信条というレベルであったためである。このようにして、「亡命二世」という複数性を運命付けられたマトヴェイエーヴィチと、「全体主義」というユニラテラリズムとは根本的に相容れることはなかったのである。

証言を補足させていただくと、たしかに、私が祖国からあるいはその残骸から離れることを強いた人は誰もいません。私は自分の意思で、居心地の良くない「アジュールと亡命の間」の状態を選びました。私は自分の国に残り、状況に適応して、沈黙を守ることでもできたでしょう。最後には雄弁な力を発揮する沈黙もあります。現在では権力を掌握している人々が旧体制下で囚われの身となっていたときに、彼らの擁護をして以来、私に恐れものはなくなりました。彼らのひとは新政府のあるポストを私に申し出ようとさえしてくれたことでしょう。しかし、難破船とともに沈む覚悟をしている老船乗りのほうが、手本として私にはふさわしいように思われました。錨を上げて、私はあえてこの危険を冒したのです。⁷

「ノマド」として移動し続けることで、「流動性」と「複数性」を極限までに追求したマトヴェイエーヴィチは、『ロシア書簡集』のタイトルにもなっているように、「アジュール」と「亡命」という表現を用いて、自身の位置を示している。ロシア革命後トルコへ到着し、さらにユーゴスラヴィアへと向った父が政治的な亡命者であったのに対し、息子プレドラグは旧ユーゴスラヴィア内において「内的亡命」を経て、ユーゴ内紛の「亡命者」・「難民」となっている。そして、今なお誕生地には戻らず、パリとローマを行き来して、いわゆる

⁶ マトヴェイエーヴィチ『旧東欧世界』土屋良二訳、31-32頁。

⁷ マトヴェイエーヴィチ『旧東欧世界』土屋良二訳、120頁。

「アジール」と「亡命」のあいだをさまよいつづけているのである。

それでは、マトヴェイエーヴィチが用いる「アジール」と「亡命」という表現には、どのような含意がなされているのだろうか。マトヴェイエーヴィチ自身は、著作のなかでこれらの単語に明確な定義を与えていない。例えば、アイジャズ・アフマドは「亡命者」を「みずからの信念と願望に反して、国家——いかなる国家であろうと——の権威によって、あるいは、肉体的抹殺を受ける恐怖によって、出生国で暮らすことを妨げられた人々」⁸として規定している。このように、「亡命」が祖国／故郷からの法的あるいは政治的な追放を指しているのに対して、「アジール」は、《故国離脱》に近い意味で用いられている。「故国離脱とは、法的な、あるいは国家による追放をうけたわけでもないのに、何らかの理由で自発的に移動すること」[強調は原文]⁹というカプランの定義から、《故国離脱》に移動者の自発性を強調していることから分かるように、当該国家から追放されることではなく、当該者の移動の自発性が含意されている。

このようにして、マトヴェイエーヴィチが選択した位相というのは、「自発的な故国離脱」であり、同時に「強制された追放」の両義性によって特徴付けられる。彼の位相は、とりわけ次のような発言によって、はっきりと浮かび上がることとなる。

亡命者のヴィジョンは、《わたしたち》と《かれら》、《わが家》と《ここ》のあいだでたえず二分されている。ありとあらゆる亡命は、避けられない事柄や災禍に、あるいは予想外の出来事や不公平な歴史に翻弄されている。亡命者たちは、亡命以前の生活と亡命後の生活のあいだで、別離と郷愁のあいだで、引き裂かれている。このような終末論的な見方は、外的な難問と内面の分裂により、さらに深刻さを増すこととなる。亡命者同士は、お互いを必要とせず、お互いに敵対しあっている。対立による争いは、大抵の場合、さもしい、不毛なもので、単なるライバル心や妬みに端を発したにすぎない。亡命者の多くは、一種のサブカルチャーのなかに閉じこもり、そこでしか通用しない基準にしたがって暮らしている。かれらが下す判断はそのことを強く感じさせ、彼らの作品は時としてそのような徴候を残している。¹⁰

不確定さのなかで彷徨うこと、磁場のない場所で浮遊することを運命付けられたマトヴェイエーヴィチは、必要以上の自己規定を試みてはいない。あえて「アジール」と「亡命」に身を置き、みずからの意思で「亡命者」を選択しているのである。このような姿勢は、EU 拡大が進行し、域内の国境規定が曖昧になりつつある今日において示唆的である。ポルトガルの知識人エドゥアルド・ロレンソは、次のように述べている。「私たち、ヨーロッパ人は歴史の主体として、また、文化の担い手として、*アエデシテテ*をもっていない唯一の人間だ。文字どおり、私たちは自分が誰だかわからない。西欧文化の本質は自分を名

⁸ カプラン『移動の時代』村山淳彦訳、196頁。

⁹ *Ibid.*, p. 193.

¹⁰ *Épistolaire de l'Autre Europe*, pp. 226-227 (以下、出典が明記されているもの以外は、すべて拙訳)。

づけようという意志に端的に示されている。¹¹ 多くの社会構成員が「ヨーロッパ」あるいは特定の「エスニシティ」や「民族」を援用して自己の命名を試みている現況にあって、マトヴェイエーヴィチは、みずからの足場を「不確定さ」のなかに位置づけているのである。

2. 「東」への眼差し

「アジール」と「亡命」の狭間で移動を宣言しているマトヴェイエーヴィチであるが、選択した移動のすべてが恣意的であったということではない。揺れ動く時には、つねに何らかの「磁極」が作用をもたらすものである。それは、ある時には政治的な磁極であり、またある時にはエスニシティやジェンダーの磁極でもあろう。彼の場合もまた、複合的な磁極が影響をもたらしている。フランス語訳の書簡集のクロアチア語の原題には『東方書簡』と名づけられている。この題名から、一連の書簡集を「東」への眼差しを綴った書としても捉えることができるかもしれない。

この書簡集を執筆する契機となったのは、1970年代に行ったソ連への旅行であった。執筆活動を開始して以来、「ロシア人」の血が半分流れていることを意識していたのは、副題に『ロシア書簡集』と名付けたことから看取される。また、すでに大半が『もうひとつのヨーロッパからの書簡』として発表されていたにもかかわらず、再度編集して、『ロシア書簡集』として提示したことは意味深いように思われる（なお、ロシア語とフランス語を父から教えられていた著者は、収録された書簡の一部をロシア語で執筆し、さらにロシア語で執筆した書簡に限って、自分でフランス語に翻訳している）。

1972年6月28日、ユーゴスラヴィア作家連盟の代表団の一員としてソ連に渡ったマトヴェイエーヴィチは、「わたしの祖先へ」と題された書簡の冒頭で次のように綴っている。

ロシアからの初めての手紙は、世紀初頭にオデッサで生まれた男に宛ててしたためられた。血筋はウクライナ人で、話す言葉と文化はロシア人だったその男は、《白》でも、《赤》でもなかった。祖国を揺り動かした騒動の本性を知って恐怖をおぼえ、亡命を決意するにいたった。1921年に《白衛軍》の最後の別動隊とともに、遅々としか進まない船に乗り、クリミア沿岸を離れて、イスタンブールへと向かった¹²。トルコに着くと、ロシア帝政の軍隊を離れ、ユーゴスラヴィア王国に避難先をもとめた。そして、若い女性と結婚をし、人生の最後の日までその地で過ごした。男は、自分の亡命を運命として捉え、亡命者の問題に関わろうとはしなかった。彼の名は、ヴセヴォロド・ニコライエヴィチ・マトヴェイエーヴィチ、わたしの父である。

父がわたしの手紙のことを知ったのは、1972年、声帯のガンの手術を受けたザグレブ

¹¹ Edouardo Lourenço, *L'Europe introuvable, Jalons pour une mythologie européenne* (Paris: Métailié, 1991), p. 23. また「〈ヨーロッパ〉には自明の同一性がない」として、ロレンソと近い見解を提示したのは西谷修である。詳細は、西谷修『世界史の臨界』岩波書店、2000年、107頁を参照。

¹² 先に引用した『旧東欧世界』の一節では「ヴランゲリ将軍の白軍とともに」という記述があり、相違が見られる。

の病院でのことだった。カニューレのために、喉の痛みは大変なものだった。自分から言葉を発することはなく、耳もよく聞こえなかった。だが、読むのは可能だった。わたしは父に長い書簡を手渡した。ソ連邦から帰ってきたばかりのわたしは、現地で見聞いたことを父に話して聞かせた。今なお懐かしんでいる父の生まれ故郷のことや、強制収容所で非業の死を遂げた親しい人たちのことも告げた。そう、わたしにロシア語を教えてくれたのも、父だった。

ダニロ・キシユもまた『ボリス・ダヴィドヴィッチのための墓』を執筆中に、本書の一部を読んでくれている。ソヴィエトの収容所で起こっていることにも関係があると思っていたからだ。キシユは、自分の父親をアウシュヴィッツで亡くしている。本書の抜粋をミロスラフ・クルレジャにも、時折要約しながら、読んで聞かせたことがある。この主題に接して、クルレジャはきづまりに感じていたようだ。にもかかわらず、わたしは、長いあいだ、この書簡を公表できずにいた。書面で言及した人たちに危険をもたらすかもしれないから。だが、ロシアとソ連を四度にわたって訪れたことで、わたしの欲求と希望は現実と向きあい、わたしの不安と疑念は真実と向きあわなければならないと思うようになったのだ。¹³

1972年のソ連訪問は公式行事の一環であったが、マトヴェイエーヴィチ自身にとっては、個人的な想いが秘められていた。つまり、父の故郷オデッサを訪問することである。病床に伏した父は、自分では祖国の地を踏むことはできないが、息子である自分が代わりに現地の様子を伝えられると考えたのだ。つまり、父の故郷を訪問することは、複数の起源を有する「自分」という人間の「流れ」を追体験することでもあったのだ。そのような個人的な目的が、4度にわたるロシア・ソ連滞在、ならびにその期間に執筆された書簡集の基本モチーフであるとしたら、もうひとつ重要なテーマが書簡の全編に渡って展開している。ソ連型の全体主義体制が有していた諸問題の告発である。なかでも、ソ連への移住後、強制収容所を送還されたクロアチア系ユダヤ人カルロ・シュタイネルに強い影響を受けたマトヴェイエーヴィチは、カルロ・シュタイネルの『シベリア 7000 日』¹⁴を、ソルジェニーツィンの『収容所群島』以前に収容所の現状を告発した書物として高い評価を下している。

このような主要な二つの視線が交錯しながら綴られた書簡集は、1970年代のロシア紀行文としてではなく、むしろ、みずからのルーツを捜し求める者の物語として捉えることができる。多数収録されているロシアからの書簡集のなかから、オデッサ訪問時に綴られた書簡を読み解くことにする。赤十字の協力を得て、親戚の住所を確認したマトヴェイエーヴィチは、オデッサでの「公式行事」を済ませたのち、まず、叔母を訪れることを決意する。父からは「古き良き時代」の追憶として聞かされていなかったオデッサでの親戚の暮らしぶりは、予想以上の、非常につつましい生活風景だった。

¹³ *Épistolaire de l'Autre Europe*, pp. 24-25.

¹⁴ この書物はサミズダード版で、旧ユーゴスラヴィアで幅広く読まれていたとされるが、国外で反響を及ぼすことはほとんどなかった。なお、フランス語訳が1985年にガリマール社より刊行されており、ダニロ・キシユの前文が付されている。

オデッサ、1972年7月8日

わたしはようやくオデッサに到着した。作家連盟の地方支部の人びとの歓待を受け、わたしたちはすみやかに《必要な儀式》を済ました。わたしはかれらに尋ねたい友人がいることを告げた。すると、かれらは、わたしの家族がここに住んでいることをすでに知っている様子だった。赤十字の仲介で知った住所をかれらに手渡した。レフ・トルストイ通り 22 番地の 22 号室、コンスタンチン・ミハイロヴィッチ・グリゴラチェンコ。元技師であったが今は定年退職した、わたしの父の従兄弟。扉を開けてくれたのは、妻エレナだった。わたしは自分の名を告げた。彼女は驚いた。まもなくしてコンスタンチン・ミハイロヴィッチが姿を現し、同じ様に驚きの表情をみせた。わたしは一枚の写真を取り出し、彼に見せた。「これがヴセヴォルドで、わたしはその息子です」。わたしは自分自身を正当化しようとそう述べたのだが、実は、相手を納得させたかったのかもしれない。「そう、これはヴセヴォルド、セヴァだ。目にするのは、50 年ぶりだ」。老人は泣きはじめた。

[…]

ナターリア・ミハイロヴナ・グリゴラチェンコ——だいがまえに離婚した夫の姓によればメシコヴァとも呼ばれる——トゥーシャおばさんは、ミコヤン通り 4 番地の 11 号室に住んでいる。昔からあるモルダヴァンカの地区の近くで、そこでは、オデッサの「小さな天才」と呼ばれた、父の級友ヤーシャ・ハイフェッツがヴァイオリンを巧みに演奏していたという。今日のモルダヴァンカは、それまで聞いていたものや、読んでいたものとはまったく異なっていた。バーベリの『オデッサ物語』で描かれていたようなユダヤ人街を見つけることはできなかった。ミコヤン通り四番地に着くと、トゥーシャおばさんの住むアパートメント 11 号室がすぐに見つかった。中庭には、石と板でつくられた物置らしきものがあった。そこがおばさんの住んでいるところで、奥行きは 5、6 メートルほどしかない、手狭で、汚れのめだつ部屋だった。ベッドから起き上がることすら難儀であるかのように思えた。浮腫のために変形してしまった足の痛みで、おばはなにもしできない状態だった。だが、才気煥発で、はっきりとした眼差しを投げかけ、年齢の割には若々しい声をしていた。わたしたちは抱擁をかわした。おばが泣き出すと、わたしも思わず涙を流してしまった。「わたしがどんな所で暮らしているか、わかったかい」。月 30 ルーブルたらずの障害年金が支給されていただけだった（良質ではない一足の靴がかるうじて買える額だった）。「わたしが戦前に働いていた分を考慮してくれなかったんだよ。オデッサの公文書館は焼けてしまい、必要な書類すら、集めることができなかったんだ」。服役していたカラガンダの収容所で、五年間労働を行っていたのだが、そこで体をこわしたのだ。結婚は失敗で、こどももいなかった。「近所のひとたちが助けてくれるんだよ。時々、起きては通りにも出てみることもあるけどね。わたしは歌手になりたかったのよ。そんな機会にはめぐりあえなかったけど」。わたしはおばの話に耳を傾けるばかりで、おばが暮らしている哀れな姿をまともに見ることはできなかった。部屋の床はあちこちで黒く焦げ、壁は煙や湿気で黄ばんでいた。壁側には錆びた縦かまの鉄製のベッドが置かれていた。その横の寝台机には、ロウソク立てとして使われたカップの受け皿が置かれ、そのうえにほとんど使い切ったロウソクが一本あった。すこし離れた場所には、傷がつき、染みのついた小さなテーブルがあり、その下には、洗面器か、ボールか、区別のつかないものが置かれてあった。ベッドの脇にはフェルトのスリッパが置かれ、それは、雪の中、中庭を歩いて用を足す時には靴の代わりとして使われていた（トイレは室外だった）。古い楽譜の束が置かれた棚には、紺碧のガラス製の人形があり、デザインから世紀初頭の作品であるかのように思われた。それが、この部屋にあった唯一のおばの私物であり、唯一思い出がこめられたものだった。もちろん、唯一の嗜好品とは言えるものではなかった（*追伸* おばがどういった状態で暮らしているかは、父には、

書簡でも、口頭でも告げていない。このような暗く、屈辱的な貧しさのなかでおばが暮らしているのを知ったら、父はあまりにも大きな苦しみを抱えることになるだろうから[斜字体強調は原文]。¹⁵

書簡には、「追伸 (Post scriptum)」として、書簡が書かれた当時の背景や、書簡をめぐる状況について説明が適宜加えられている。上述の書簡では、最愛のおばの姿が惨めな様子であるのを目の当たりにして、本来の宛名である父へ「投函」することを断念していることが「追伸」によって理解される。そしてまた、本来父に宛てて「投函」されるべき書簡が、父の目には触れず、われわれ、つまり本来の宛名とは異なる読者によって、読まれていることになる。より正確に言うと、このような「追伸」によって、「読者」という大衆によって読まれるべき《書簡》として変容を遂げたということであろう。この点に、マトヴェイエーヴィチの書簡集が、特定の人物間で交わされる単なる私信ではなく、「開かれた」書簡集であることが看取される。

しかしながら、いかにこれらのテキストが「開かれた」書簡であるとはいえ、筆者にとって、叔母は、まず第一に、その場に現前する存在である。

おばは、わたしの叔父ヴラジミールのことを話しはじめた。周囲から評価されているロシア文学の先生でフランス語も話し、開放的で、大胆な人だった。既婚でこどもが二人いる女性歌手に恋をしてしまい、結婚を決意した。けれども、その結婚は幸せなものではなかった。妻の元夫は、政治家たちに一定の影響を及ぼす年配の男だったが、おなじアパートに住んでいた。ヴォロージャは、党を批判する言動を述べ、「外国人と関係を有し」ており、弟ヴセヴォルドが亡命していたことや「トロツキスト」であったことを責められ、最悪の刑罰を受ける羽目になった。ある晩、彼は連行されてしまった。そのあと、シベリアのどこか、コリマで亡くなったのを知ったという。

彼のせいで、わたしの祖父、ニコライ・イヴァノヴィッチも同様に幽閉されてしまった。アルマ・アタで五年を過ごしたのだった。「彼が戻ってくる頃には、妻のネオニラ・ダニーロヴナは、わたしたちはニーナと呼んでいたわ、あのひとは完全に理性を失ってしまったんだよ。それから、すぐにこの世を去っていった」。¹⁶

マトヴェイエーヴィチがみずからの原点を模索する旅で体験したのは、あまりにも苦々しいものだった。確固たる足場を捜し求めて降り立ったオデッサで、マトヴェイエーヴィチが知ることになったのは、離れ離れになり、その日の暮らしもおぼつかない、不安定な生活を営む親族の姿だった。今まで欠落していた人生というパズルの断片を探せば探すほど感じるのは、そのパズルの断片がさらに複数の断片によって分断され、そのいくつかはすでに消失してしまったという事実のみであった。

わたしは気を取り直さなければならなかった。一度にあまりにも多くのことを知ってしまった。わたしは通りに出たが、あてどなく大またで歩き、低い塀のうえに腰かけた。

¹⁵ *Épistolaire de l'Autre Europe*, pp. 42-44.

¹⁶ *Ibid.*, p. 44.

そこで、わたしは涙をながした。すこしばかり気が落ちついたようだった。通りがかりの人はわたしをながめていた。だがわたしはまわりのことを気にしなかった。わたしに声をかける人があったが、何と答えたのかもおぼえていない。われに返るには、何か普通なもの、しっかりとした、安定したものに、すがりつく必要があった。わたしは海岸まで歩いていった。わたしの目の前に広がった海は、わたしの家族が住んでいた時と同じ海であり、わたしの父が船に乗ったのと同じ海だった。わたしがちょうどさしかかった通りの名前は、以前から変わっていなかった。デリヴァソヴスカヤ通り。オデッサ港へと続く有名な階段もまた、変わっていなかった。これらすべては、わたしの気をすこしばかり落ちつかせてくれた。そして、作家連盟の建物へときびすを返した。わたしの身に起こったことを表情から悟られたくはないと思った。

けれども、だれもわたしのことを見ようとしなかった。

モスクワへの帰路、ユーゴスラヴィアへの出発といった残りの行程は、わたしには何も意味をなさなかった。わたしの目には何もはいらず、なにも記憶に残っていない。わたしは書くのをやめていた。¹⁷

父の故郷オデッサは、彼の親族が暮らす「空間」と同一であったが、異なる空間で進行した「時間」の差異は想像を絶するものであった。父の故郷を訪れ、自分のルーツを求める行為は、あまりにも過酷で、残酷であった。しかしながら、マトヴェイエーヴィチは、おそらくロシアに何らかの「磁極」を見出したのかもしれない。一年を経ずにふたたびソ連を訪れる機会を得ているためである。グルジア、アルメニアも訪れた滞在中に、幾人かの親戚や知人との邂逅を果たしたのみならず、とりわけ、マトヴェイエーヴィチの心に強く刻まれることとなる人物と出会っている。

オデッサ、1973年11月25日

[...] 隣に住んでいる看護婦の婦人は、トゥーシャお婆さんの手助けをしてくれている。「ヴセヴォルド・ニコライエヴィチが送ってくれた荷物を彼女にも分けてあげないとね。それから、あとで、ピョートルの所へ連れて行ってもらいなさい。訪ねないわけにはいかないよ。20年以上も収容所で過ごした人だから、収容所のことは何でも話してくれるだろうから。おまえのおじさんのヴォロージャもよく知っていたからねえ。ピョートルというのは本名じゃないけど、また悪いことをしでかさないように、皆そう呼んでいるんだよ」

隣に住む婦人は、ピョートルの家までわたしを案内してくれた。「遠い所に住んでるんだよ。ひとりで行くようなところじゃないからね」。わたしたちはしばらく歩いた。これから会うのは、長年の幽閉生活を経て、『死者の家の記録』の徒刑囚アレクサンドル・ペトローヴィッチ・ゴリャンチコフのように「できる限り現世から離れて」暮らすことを望んでいる人なのではないかと、ふと頭をよぎった。わたしは自分の記憶のなかに、ロシア文学に登場する人物や生活風景を探しもとめた。隠者ゾシマ、巡礼者マカール、プーシキンの「独房にこもった隠遁者」、レビヤートキン、預言者、魔法使い、浮浪者、求神主義者、ドゥホボル派の一員、逃亡者、スコヴォロダーのような放浪者、サロフの聖セラフィム、ロシア史でよく知られた数多くいる「変わり者」や苦行者たち。ピョートルは、これらすべての人々の雰囲気それぞれすこしずつあわせもった容顔をしていた。年は70くらいだろうか、だが、目つきははっきりとし、奥が深く、若々しく見えた。服

¹⁷ *Ibid.*, p. 46.

は普通の民間人のもので、刺繍のほどこされたシャツを着ていた。髪の毛も、歯もまだしっかりしていた。白くなったあごひげは、よく手入れがなされていた。短い節ごとにはっきりと区切って発音し、しわがれてはいるが、しっかりとした声で話を進めてくれた。(もし彼の言葉を書き写したとしたら、大半の意味が失われてしまうだろう)。ヴォロージャおじさんとは一緒に「東部」への旅をしたという。藁が敷きつめられた車両で、おたがいに覆い被さるようにして眠り、数千キロの行程をしのいだのだ。どこに向かうかまったく見当がつかなかったという。「わたしたちは、お互いの人生を余す所なく語りあったんじゃ。そのおかげで、わたしたちの気が落ちついた。だが、それぞれ出発しなければならない時がやってきた。そんな時における言葉などないものだ」。別れなければならない駅で、二人は同じ方向へと歩みを数歩きざんだ。「わたしたちの背後で残らなければならない歩み、わたしたちがやってきた歩み。帰る者は、それぞれ異なる大地を踏むものじゃ。あれほどの旅のあとでは、歩みそのものが変わってしまう。出かける理由がわからない時は、帰ってくる理由もわからないもの。お前さんは、おまえの叔父ヴラジミルを誇りに思わなきゃいかん。あいつは、帰ってこなかったのだから」。わたしは返答するすべを知らなかった。とりわけ、この帰還についての答えというものを。「わたしたちは待っていたんだ、あいつが帰ってくるのを。でも、それぞれが望んでいたものが違っていったのだ。長い年月を経ると、手や瞳が、言葉に代わって、話すようになる。ある一つのことを考えれば考えるほど、その思いの先にあるものはどんどん変わってってしまう。はたして、それは同じままなのだろうか。しまいには、おたがいを区別することすら難しくなる。わたしたちはあまりにも遠くからやってきて、それぞれ災いを抱えていたんだ」。

わたしは、この言葉をどうやって整理したらいいか、わからずにいた。

[…]

どうにか、わたしは気持が落ちついたので、お礼の言葉を告げて、ささやかな志を手渡そうとした。だが、ピョートルはけっして受け取ろうとはしなかった。「あなたは物書きだそうだね。ならば、パンについて何か書いておくれ。そうしてくれると、ありがたい。わしも、長いあいだ、パンについて書きたかったのだよ」。わたしは約束を守ることを誓い、ナターリア・ミハイロヴナへの手紙に同封すると告げた。「どうやら、あなたを連れてきた人は、行ってしまったようだ。夜に、ここら辺りを一人で歩くのは好ましくない。息子に道を案内させましょう」。

このような出会いに対して、わたしは心の準備ができていなかった。その後、トゥーシャの家に戻ったが、われに返るには、しばらく時間が必要だった。¹⁸

ピョートルとの出会いはいくつかの問いかけをマトヴェイェーヴィチに投げつけている。まず、ピョートルとの対話で導き出すことができるのは、来るべき者と帰らざる者の成立しえない対話であるということ。当事者間で交わされた会話は、すでに一方の側から再現することしかできず、すでにこの地をあるいはこの世を去っていったものは、永遠なる欠落として再現ができないということである。そして、第二に、あずかり知れない者が関与することの難しさ、つまり、傍観者となるにはあまりにも難しく、また主要な行為者となるにはあまりにも状況を把握していないということ。父そして自分のルーツを捜し求める行為が積極的であればあるほど、消極的にならざるをえない現実が次々と突きつけられてくる。傍観者として静観することはできないと思いつつも、別の時間と別の空間で繰り広

¹⁸ *Ibid.*, pp. 67-69.

げられている複数の生活を縦断することはできないということである。このような状況の中であって、おそらく、隔たった時間と空間を紡いでくれる役割を果たすのを期待して、マトヴェイエーヴィチが選択したのは「書簡」であったのかもしれない。つまり、欠落した時間を埋め、隔たった距離を多少なりとも近づけようとする手段のひとつとしての「書簡」である。

いずれにしても、1970年代初頭に行ったロシア旅行は、プレドラグに深い感慨を与えている。父の故郷、また自分のひとつの原点の確認作業であったのみならず、ひとりの反体制派知識人の誕生にも寄与することとなったからである。ソ連訪問後、マトヴェイエーヴィチは次のように述べている。

ロシアへの旅行は、わたしの態度を決定づけることとなった。権力を掌握した党やその支配下にある司法機関の決定に対して抵抗し、かれらの思想と相容れず、またかれらのイデオロギーとほとんど接点がないために、処刑されたり、幽閉されている作家や知識人たちを守る必要性を日増しに強く感じるようになったからだ。¹⁹

この言葉通り、マトヴェイエーヴィチは、このロシア訪問以降、数多くの書簡を政治家、政治組織や国際機関に宛てて次々と送付している。反体制派知識人として国内外で活動を推進することとなったマトヴェイエーヴィチが、他の反体制派知識人と一線を画しているのは、ロシア、ユーゴスラヴィア、チェコ、ポーランド、ハンガリーなど、「東方」世界の多岐に渡る知識人や作家たちを擁護している点であろう。²⁰ このように、マトヴェイエーヴィチは生まれ故郷の旧ユーゴスラヴィアだけではなく、「ロシア」にもみずからの出自の磁極を見だしのである。そして異なる空間に暮らしているながら、共通の苦悩を抱える人物、とりわけ、全体主義体制下の反体制派知識人と共闘することになる。そして、この際に政治的にも重要な機能を果たしたのが、「公開書簡」というジャンルの選択であった。

3. 《書簡体》というジャンル

マトヴェイエーヴィチは、同一の書簡に幾度か追加・変更を加えて、クロアチア語のみならず、フランス語など複数の言語で発表している。だが、このような偏執的なまでの書簡体へのこだわりは、マトヴェイエーヴィチに始まったものではない。ソール・ベローの『ハーツォグ』の例など、書簡を重要なファクターとする文学作品は決して少なくはない。しかし、著者がとりわけ刺激を受けたのは、スラヴ的な伝統、とりわけロシア文学からで

¹⁹ *Ibid.*, p. 75.

²⁰ このことは、クロアチアのカルチュラでの夏季セミナーの経験が作用しているのかもしれない。エルンスト・ブロッホ、アンリ・ルフェーブル、エーリッヒ・フロム、ユルゲン・ハーバーマス、カレル・コシークなど、欧州の知識人を各地から招いたこのセミナーは、旧ユーゴの一部の知識人によって企画されたものである。マトヴェイエーヴィチ自身、学際的な視点の習得に役立ったと認めている。詳細は、マトヴェイエーヴィチ『旧東欧世界』38-40頁を参照。

あった。

これ〔訳注：公開書簡を書くこと〕は、自発的な表現の成果や自分が感じた不満が結実したものではなかった。公開書簡を書くという習慣、あるいはこのような奇癖について、わたしは熟考をかさねた。わたしが関心を抱いていたのは書簡文学であり、目の前には、古典か近代かを問わず、モデルが存在していた。スラヴの伝統においては、友人と公衆を同時に意識して書かれたこのような書簡は、非常に一般的であった。若い頃に、ゲルツェンの『古い同志への手紙』に夢中になり、その後、ゴーゴリの『友人たちとの往復書簡』のとりことなったほどだった。あまりにも多くのものが書かれ、必要以上に出版されるこの世紀にあって、友人のみに宛てて書いたものではない断章を篩いにかけてことにした。わたしが手紙を書いていたのは、自分自身の運命をかけていた人々に対してだったのだ。²¹

マトヴェイェーヴィチのテキストを見ていくと、それぞれの書簡には、執筆された日付が付されており、執筆期間が、1972年のロシア滞在以降、1990年代前半までの約20年にわたっていることがわかる。二冊の書簡集『もうひとつのヨーロッパからの書簡』と『アジールと亡命のあいだ——ロシア書簡集』の第一の相違点は、タイトルが明白に示しているように、書簡の「指向性」である。つまり、『もうひとつのヨーロッパからの書簡』では、ハヴェル、ミウォシュ、キシユなどの「東欧」世界を意識した宛名が連ねられているのに対し、『アジールと亡命のあいだ——ロシア書簡集』の宛先はロシアの人々に限定されている。そればかりか、前者は、政治家や政党、国際機関をも視野に置いた政治的な告発の書簡としても機能しており、ある意味でジャーナリスティックな文体によって特徴付けられる。それに較べて、後者は父の故郷ロシア訪問という個人的なテーマが主題として掲げられており、内的告白という側面がより明確になっている。

通常、「書簡」には、執筆された「日付」と「場所」の刻印がなされている。確かに、日付と場所の明示という点では「日記」と共通点を有する。だが、とりわけ、「宛名」となる「読み手」が文書を読む時の切迫感と緊張感とは異なる指向性を有している。つまり、「日記」を読む第一の読者が「書き手」本人であるのに対し、「書簡」では「読み手」が基本的には特定されていることである。読み手が特定されることで、テキストの表出方法もそれに対応したものとなる。それは、内容、文体、言語の選択という点においてより一層顕著になる。

この種の書簡の多くは、今なお世界中を駆け回っている。投函されてからかなりの時間が経つというのに、宛名のもとに届いているかどうか知ることすらできないものもある。どこかで、何らかの理由で紛失したことすら、本人が知らずにいるものもある。ボトルの中に入れられて、海へ投げられたものもある。その瓶はいつか相手に届くかもしれない。誰かがこの手紙にまつわる物語を書く役回りを引き受けてくれるならば、これらの手紙は、わたしたちが生きた時代の歴史を再構成するのに役立つかもしれない

²¹ *Épistolaire de l'Autre Europe*, p. 10.

い。裁判所や各種機関、政治団体や政治指導者に宛てられた要求や訴え、訴訟の見直しや懲罰の軽減の要請書、無実や名誉回復を訴える書簡、どこかに保管してあるかもしれない通告、破棄したくなるような通告、どうやって書かれたのか想像もつかない刑務所や収容所からの手紙、仮兵舎のなかで最も人目につかない片隅、煉瓦のすきま、古着などに隠された手紙の写し。受け取ることのできた返答、代わりに与えられた新たな処罰——通信の権利の剥奪は、時として死刑に相当するものであった。亡命先からの手紙は、受け取った者もよい心地がしないが、内的亡命者たちからの手紙もまた、検閲や不安のために、取り置きや用心深さの痕跡が残っている。手紙の書き手が、普通の人であれ、高名な作家であれ、すべての手紙の目録を作り、神のみぞ知る基準で分類し、それらから史のあるいは叙事詩的な書簡小説、反体制の文学がわたしたちに今まで遺産してくれたなかでも最も感動的な作品をつくりあげることができるかもしれない——このような考えは、わたしが愛する幾人かの作家たちをも魅了するだろう。わたしは大げさに言っているのではない。小説、伝記、個人日記、回想録、旅行記、系譜などで、手紙を内包せずに、それ自体の名前にふさわしい文学作品というのは、実にすくない。書簡は、最初の、そして、最高の文学ジャンルなのである。²²

マトヴェイエーヴィチの「書簡」への想いは、この引用文に集約されている。「最初の、そして、最高の文学ジャンル」としての位置づけは、反体制派の知識人としての活動が背景にあるように思われる。つまり、公式の執筆活動が制限された状況下での、国内の仲間たちとの通信あるいは外国プレスへの発信のいずれにおいても、「書簡」という媒体が多く用いられ、この「書簡」こそがマトヴェイエーヴィチの執筆の場であったからである。

また、「アジュール」と「亡命」の中間状態、すなわち母語の圏外にあったマトヴェイエーヴィチが、多くの亡命作家同様、直面したのは、執筆言語の問題である。この点について、フランスの批評家ロベール・ブレーションは、次のように述べている。「これまでも、彼は文学研究、論文、そして広い意味での論評はたいていフランス語で書いてきた。彼のフランス語は節度を保ち、秩序だった表現で、良識があり、少々没个性的な文体である。しかし体制を攻撃する『書簡』のような、愛情と錨が一体となっている純然たる創作では、母国語のクロアチア語、またときとして父親の言葉であったロシア語を用いてきた。そのクロアチア語やロシア語は閃光を放ち、非常に個性的なものである。ところが私には不可能とされていた言語と文体の転換をなし遂げて、彼は本書を直接フランス語で、しかもクロアチア語やロシア語で書くときと同じ文体で書き上げた」²³ これと関連して、『もうひとつのヨーロッパからの書簡』に収録されている書簡の大半が、フランス語訳のみで発表されているのは、テキストの公開性という問題と深くかかわってくるように思われる。なぜなら、「この種の手紙は出版されてようやく《公開書簡》となるのである」²⁴と述べているが、換言すると、「文章は読まれることでようやく《テキスト》となる」。その基本的な原則が、まさに「書簡」というジャンルのなかに秘められており、それゆえ、マトヴェイエーヴィチは「書簡」というジャンルにこだわりを見せたのであろう。

²² *Ibid.*, pp. 10-11.

²³ マトヴェイエーヴィチ『旧東欧世界』土屋良二訳、246頁。

²⁴ *Épistolaire de l'Autre Europe*, p. 7.

4. 結びに

全体主義体制下で執筆された書簡集として、チェコの劇作家ヴァーツラフ・ハヴェルによる『オルガへの手紙』²⁵がある。出版の可能性が限られていたなかで、ハヴェルのみならず、チェコの多くの作家が「書簡体」あるいは「日記」といった形態を用いて執筆活動を行っていた。このことは、おそらくマトヴェイエーヴィチなど、全体主義体制下の作家たちが直面していた状況と重なるものと思われる。

「書簡」を他のジャンルを差異化するものとして、「宛名」の提示、執筆された「日付」・「場所」の明示といった点が挙げられる。ハヴェルにおいても、マトヴェイエーヴィチのいずれの作品においても、試みられているのが、送信者（＝書き手）と宛名人（＝読み手）との唯一無比の関係の構築である。すなわち、経験の共有化を意図しての執筆という点である。拘留されていた刑務所などから、妻オルガへ宛てたハヴェルの書簡集は、外界との唯一のコミュニケーションの手段であった。ある種の「内的亡命」の状態にあつて、ハヴェルが綴った文章は、妻オルガ、そして（開封していたことが想定される）検閲官のみならず、不特定のひとびとを讀者として想定している。これに対し、マトヴェイエーヴィチは、「この種の手紙は出版されてようやく《公開書簡》となるのである」と述べているように、とりわけ「公開書簡」としての機能は、「公の場」に登場することで顕在化することを念頭に置いていたと思われる。

最後に、マトヴェイエーヴィチの書簡集の特徴を総括すると、次のことが指摘できるように思われる。まず「書簡体」という観点から全体主義における「書簡文学」の可能性を提示したということ、すなわち、告発文、公開書簡、日記といった異種のテキストを同列に置き、同じ「テキスト」として捉えることで、テキストの同位性を明示にしているからである。そしてこのことは、みずからの出自の複数性と「アジール」と「亡命」の中間状態に見出される流動性を肯定的に提示し、「複数文化」の可能性を具現した点と密接に絡み合っているように思われるのである。

²⁵ 邦訳の題名は次のとおり：ヴァーツラフ・ハヴェル『プラハ獄中記 妻オルガへの手紙』飯島周訳、恒文社、1995年。